

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (101)

「お兄さんを好き」

小3のタモツ君の妹のエミちゃんは五歳になりました。お母さんとおばあさんの家に来て
います。テレビの画面にあわせて、踊っています。おばあさんが言いました。

「エミちゃんは、このお兄さんが好きなのですか。」

「うん。エミ、このお兄さんを好き。」

お母さんが言いました。

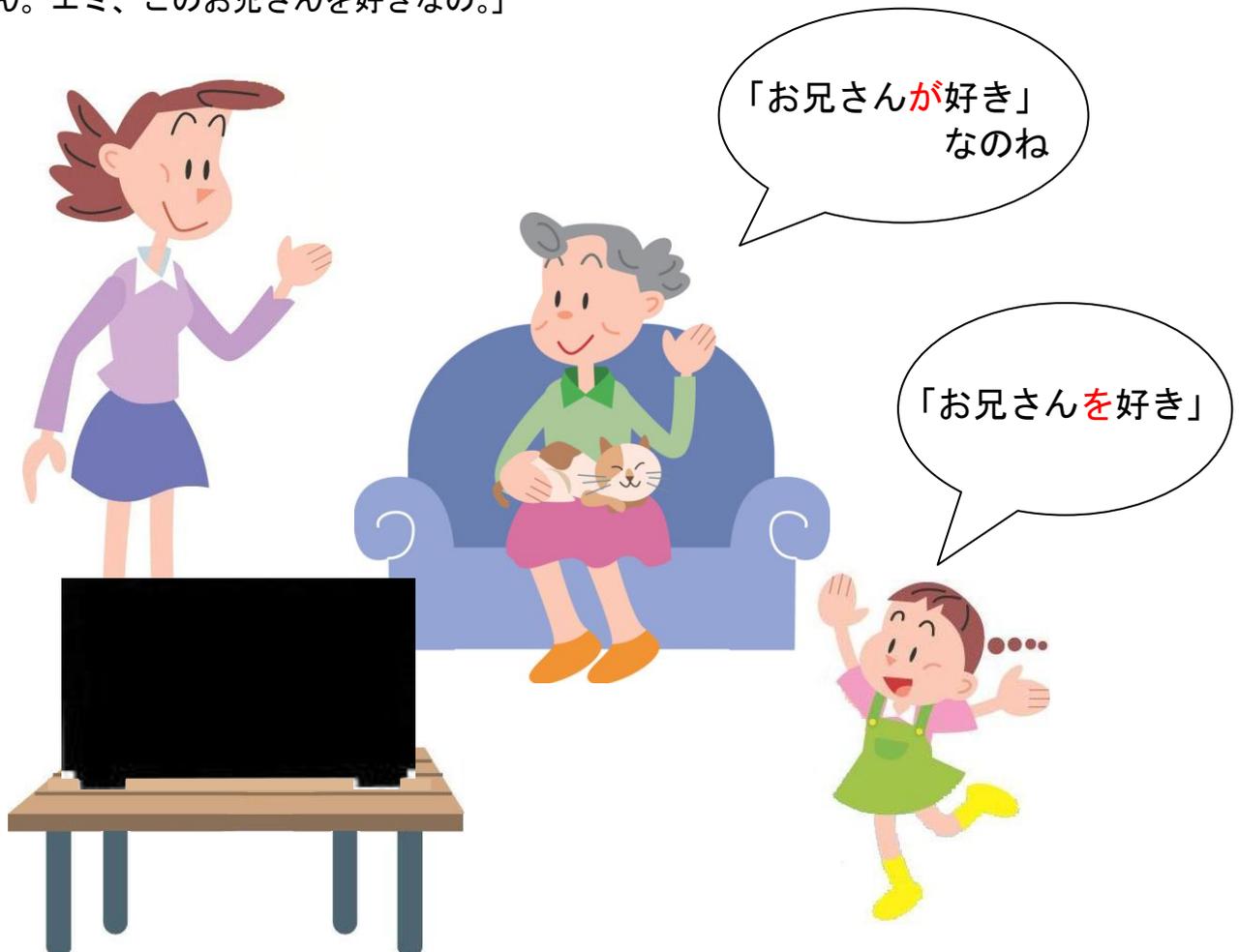
「エミは、このお兄さんが好きなのよね。」

「うん。このお兄さんを好きなの。」

おばあさんが言いました。

「そう。エミちゃんは、このお兄さんが好きなんですね。」

「うん。エミ、このお兄さんを好きなの。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (102)

「～が好き・～を好き」

タモツ君のお母さんとおばあさんが話しています。

「お義母さん、どうしてエミは、「を好き」って、言うのでしょうか。」

「まわりの人が「を好き」と言うのを聞いているのではないですか。」

「保夫さんも私も「が好き」ですけれど……」

「お父さんお母さんが「が好き」でも、テレビでは、俳優さんが「あなたを好き！」などと、
年中、言ってるじゃありませんか。」

「そうですね、「私はあなたを好きです。」って言うのを聞いたことがあります。」

「ほんとうは「私はあなたを好きます。」なのよね。「好きます」なら、「好く」が動詞です
から「あなたを」でよいのですが、「好きです」になると、形容動詞としての用法ですから、
「あなたが」であってほしいのよね。」

あなたを → 好きます

あなたが → 好きです



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (103)

「好きです」は形容動詞？

タモツ君のお母さんとおばあさんが話しています。

「お義母さん、「私はあなたが好きです。」の「好きです」は、形容動詞なのですか。」

「そう。「好き」は、動詞の「好く」の連用形が名詞になったのよね。「好きこそものの上手なれ」とか「^{たて}蓼食う虫も好き好き」とかって、言うでしょ。」

「ああ、その「好き」なんですね。」

「そう。名詞だけど、「好きな人」のように使うわね、「好きの人」でなく……」

「ええ。」

「それに、「好きに起き、好きに食べ、好きに寝、好きに生きる。」なんて言えるでしょ。連用形が「好きに」、連体形が「好きな」だから、「好きだ」という形容動詞と見られるわけ。

「好きです」は、丁寧な形の形容動詞と見ていいでしょ。」

形容動詞「好きだ」「好きです」の活用表

活用形	未然形 (ウ)	連用形			終止形 (。)	連体形 (人)	仮定形 (バ)	命令形
		(タ)	(アル)	(ナル)				
形容動詞 「好きだ」	好きだろ	好きだっ	好きで	好きに	好きだ	好きな	好きなら	○

活用形	未然形 (ウ)	連用形	終止形 (。)	連体形 (ノニ)	仮定形	命令形
		(タ)				
形容動詞 「好きです」	好きでしょ	好きでし	好きです	好きです	○	○

※○は活用形が用いられないもの

【編集部注】形容動詞「好きだ」は「好きだろ(ウ)・好きだっ(タ)／好きで(アル)／好きに(ナル)・好きだ(。)・好きな(人)・好きなら(バ)・○」のように活用します。丁寧な形の形容動詞「好きです」は「好きでしょ(ウ)・好きでし(タ)・好きです(。)・好きです(ノニ)・○・○」のように活用します。○の部分の活用形は用いられません。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (104)

「私はあなたが好きです。」

タモツ君のお母さんとおばあさんが話しています。

「お義母さん、「私はあなたが好きです。」の「好きです」が形容動詞だということはわかりましたが、どうして「あなたが」なのかわかりませんわ。」

「そうね。形容詞や形容動詞が述語になる場合は、主語が「ナニハ」になるのよね。」

「ええ、「ナニハドンナダ。」という文ですよね。」

「そう。この場合は、「私は好きです。」というわけね。でも、これだと、何について「好きです」なのかわからないでしょう。」

「ええ。」

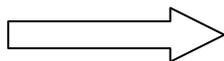
「だとしたら、「私は、好きなのは、あなたです。」と、言えばどうかしら。この「好きなのは、あなたです。」が「あなたが好きです。」になったと考えると、どうかしら。」

ナニハドンナダ



「私は好きです。」

何について
「好きです」??



「私は、好きなのは、あなたです。」



「私は、あなたが好きです。」

(ナニガナンダ)



【編集部注】ここでは、「私はあなたが好きです。」という文が「私は好きなのはあなたです。」という文の変化したものと考えています。「私は」があるので複雑になっていますが、コラム83「私が長谷川です。」、コラム84「長谷川は私です。」で話題になった「ナニハナンダ。」が転位して「ナニガナンダ。」になるのと同じ考え方です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (105)

「熱熱のスープが飲みたい」

給食の時間です。小3のサユリさんが隣の席のタモツ君に言いました。

「涼しくなると、^{あつあつ}熱熱のスープが飲みたいね。」

「そうだね。熱熱のスープだと、温かくなるもんね。」

「でも、給食だと、「いただきます」のときには、ぬるぬるになってる。」

「ぬるぬる？」

「うん。うんと、ぬるーくなってる。」

「ああ、そうか。サユリちゃんはときどきおもしろい言い方をするね。さっきも「熱熱のスープが飲みたい」って……。スープが飲むんじゃなくて、スープを飲むんだよね。」

「スープを飲む？ でも、「飲みたい」って言うときは、「スープを飲みたい」じゃないでしょ。タモっちゃんは「スープを飲みたい」って言う？」

スープが飲む??

スープを飲む
→スープを飲みたい



スープが飲みたい



スープを飲みたい??

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (106)

「～が飲みたい・～を飲みたい」

学校の帰りにおばあさんのところに寄ったタモツ君が言いました。

「学校でサユリちゃんに言われたんだけど、「飲みたい」って言うときには、「^{あつあつ}熱熱のスープを飲みたい」じゃなくて、「熱熱のスープが飲みたい」と言うんだって。そうなの？」

「あらあら、ずいぶんむずかしいことを話しているのね。」

「むずかしいことなの？」

「そう。タモっちゃん、おやつが欲しくない？ クッキーがありますよ。」

「ありがとう。クッキーが食べたい。」

「ほら、今、「クッキーを食べたい」でなく、「クッキーが食べたい」って言ったけど、気がついた？「食べる」のときは「～を食べる」だけど、「食べたい」のときは「～が食べたい」になるのね。でも、「～を食べる」に「たい」をつける「～を食べたい」も使うのよ。」

クッキーが - 食べたい

「食べる」の連用形+助動詞「たい」

クッキーを食べ - たい

「クッキーを食べる」+「たい」



【編集部注】タモツ君のおばあさんの言うように、「クッキーが食べたい。」とも「クッキーを食べたい。」とも言います。動詞の「食べる」の連用形に助動詞の「たい」のついた「食べたい」が一つの形容詞のように意識されると、「クッキーが食べたい。」になり、「クッキーを食べる」という動詞のまとまりに「たい」をつけるというように意識されると、「クッキーを食べたい。」になるようです。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (107)

新しい常用漢字表

学校の帰りにおばあさんのところに寄っておやつを食べていたタモツ君が言いました。

「きょう、すごいこと教わったんだよ。「体育」の「育」って、「育つ」で「そだつ」と読むけど、「育む」で「はぐくむ」とも読むようになったんだって。」

「そういえば、常用漢字表の訓クンに加えられたって、新聞に出ていたわね。」

「常用漢字表って？」

「ふつうの人の使う漢字の目安めやすとして、内閣総理大臣が告示しているものなの。平成22年11月30日にそれまでの常用漢字表が廃止されて新しくなったの。それまでは1945字だったけど、196字が加わって5字が除かれたので、2136字になったの。ワープロが広く使われるようになったから、書けなくても打てればいいのかしら、挨拶アイサツの挨拶ケンソンとだとか謙遜ケンソンの遜ケンソンだとか憂鬱ユウウツの鬱ルリだとか瑠璃ルリの瑠ルリと璃ルリだとか、書くのが大変な漢字も入ったのよ。」

今回は、
29年ぶりの
改定だったのよ。

昭和 21 (1946) 年制定	当用漢字表	……1850 字
昭和 56 (1981) 年制定	常用漢字表	……1945 字
平成 22 (2010) 年制定	常用漢字表	……2136 字



【編集部注】謙遜の遜はシンニュウの点が一つのもありますが、告示された常用漢字表では、二点のシンニュウ「辵」です。新たに加わった遡及ソクキョウの遡、なぞの謎も二点のシンニュウです。ただし、一点のシンニュウも許容されることになっています。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (108)

はぐくむ

学校の帰りに寄ったおばあさんのところで、タモツ君がおばあさんと話しています。

「新しい常用漢字表で196字も増えたのはわかったけど、どうして「育む」と書いて「はぐくむ」って読むことになったのかな。」

「3年生で教わる「育」は、「体育」の「イク」という音と「育つ・育てる」の「そだつ・そだてる」という訓クンだったけど、それに、「育む」の「はぐくむ」という訓も加わったの。」

「「はぐくむ」って、「そだてる」というのと同じこと？」

「そう。卵からかえ孵ったばかりのひなは、まだ、体の毛が十分には生え揃っていないから、親鳥が自分の羽でひなをくくんで温めるの。」

「くくむって、つつむことでしょ。羽でくくむから、はぐくむなんだね。」

「さすが、タモっちゃん。くくむって、くるむとかつつむとかいうのに似ているわね。」

育	{	音 <small>オン</small>	イク
		訓 <small>クン</small>	そだ - つ
			そだ - てる
			はぐく - む



))))



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (109)

「はね」と「は」

おばあさんのところで、タモツ君がおばあさんと話しています。

「親鳥がひなを羽でくくんで温めて育てるから「はぐくむ」なんだってわかったけど、どうして「はねくくむ」って言わないのかなあ。」

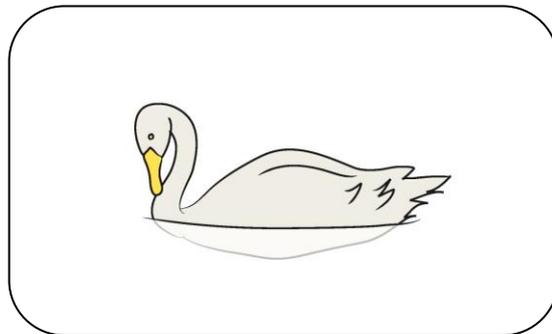
「そうねえ、おもしろいわね。タモっちゃんは、鳥が水浴びして羽をきちんと整えているのを見たことがあるわね。鳥が何をしているって言うかしら。」

「はねづくろいかな。」

「そう。おばあちゃんは「はづくろい」って言う。」

「前に、にわとりがバタバタしていたら、おじいちゃんがすごい「はおと」だって言った。羽の音が「はねおと」でなく「はおと」なんだよね。」

「よく思い出したわね。「はね」が「は」になるのって、「はばたく」もそうかな。」



はねづくろい



はづくろい



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (110)

はばたく

おばあさんのところで、タモツ君がおばあさんと話しています。

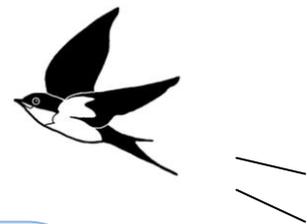
「そうか。「はねくくむ」が「はぐくむ」、「はねつくろい」が「はづくろい」、「はねおと」が「はおと」だから、「はねはたく」が「はばたく」なのかな。」

「さすが、タモっちゃん！ でも、どうして、「はたく」なんてことば、知ってた？」

「ずうっと前、けんかして、エミをぶったことがあったの。そのとき、お父さんが「けんかはいいいけど、はたいてはいけない」って……。」

「そう。そんなことがあったのね。掃除用具の「はたき」もあるけど、「はたく」って「たたく」と「はらう」とがいっしょになったみたいなことばね。」

「わかった！ 鳥が羽でカいっぱい空気をはらうようにたたくから「はばたく」なんだね。鳥ははばたいて空中を飛ぶんだ。おばあちゃん、ありがとう。」



はねくくむ → はぐくむ
はねつくろい → はづくろい
は ね お と → はおと
は ね は た く → はばたく



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (111)

「我が子はぐくめ」

夕食時です。タモツ君がお父さんに言いました。

「きょう、前に習った「体育」の「育」、「育つ・育てる」の「育」が、「育む」と書くと「はぐくむ」って読むようになったって、教わったんだよ。」

「ずいぶん古めかしい読み方を習ったんだね。」と、お父さん。

「古めかしいの？」

「うん。万葉集という大昔の本に出ている歌に「はぐくむ」が使われているんだよ。」

「我が子はぐくめ天の鶴群、でしたっけ。」と、お母さん。

「そう。中国に行く船に乗った子を見送るお母さんが詠んだ「旅人の宿りせむ野に霜降らば我が子はぐくめ天の鶴群」という歌。旅人であるわが子が野宿する野に霜が降りるような寒い夜には、羽でくるんでやってくれ、空を飛ぶ鶴の群れよ。——というんだ。」



旅人の宿りせむ野に霜降らば
我が子はぐくめ天の鶴群

【編集部注】「旅人に」の歌は、万葉集巻9 - 1791の歌です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (112)

「はぐくみ持ちて」

子どもたちの寝静まったあと、タモツ君のお父さんとお母さんが話しています。

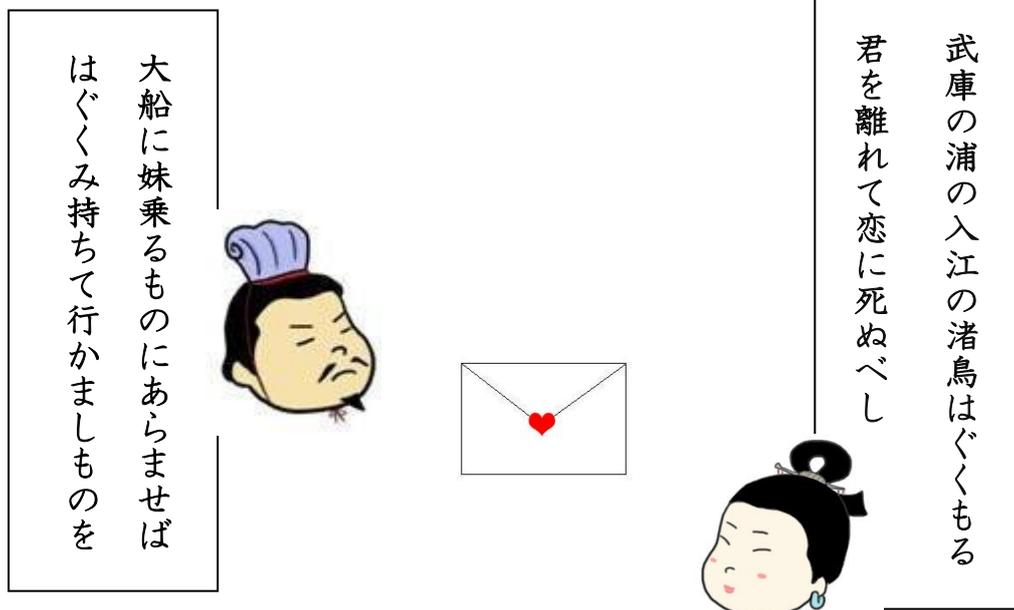
「きょう、タモツ、お義母さんのところでも「はぐくむ」のことを話したんだって。親鳥がひなを羽でくくんで温めて育てるんだっておばあちゃんが教えてくれたって……」

「そう、それはよかった。タモツに「はぐくむ」って言われて、ふっと学生時代のときのことを思い出したよ。」

「学生時代のときのこと？」

「うん。「はぐくむ」っていうと、羽でつつむというような動作が浮かぶよね。だから、羽のある鶴が「はぐくむ」のはいいけれど、「大船に妹乗るものいもにあらませばはぐくみ持ちて行かましものを」はどうだろうって気にした同級生がいたんだ。」

「そうなの。親鳥がひなを羽でつつむように、優しく大切にという比喻表現よね。」



【編集部注】「大船に」の歌は、「武庫の浦の入江の渚鳥はぐくもる君を離れて恋に死ぬべし——武庫の浦の入江の渚鳥が羽でくくむように優しく大切にしてくださいるあなたに別れて、あなたの恋しさに死にそうです」（万葉集巻 15 - 3577）という女性の歌を受けて、その歌に返した万葉集巻 15 - 3578 の歌です。「新羅に向かう大船にいとしいあなたが乗ることのできるものであるなら、そうっと優しく抱きかかえて行くだろうに」。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (113)

「あが子」と「わが子」

子どもたちの寝静まったあと、タモツ君のお父さんとお母さんが話しています。

「さっき、「我が子はぐくめ天の鶴群」って言ったときも気になったのだけど、保夫さんが学生のころ、「あが子」だった？」

「いや、確か「わが子」だったように思うけど……。」

「そうよね。この間、短大の同窓会するとき、この歌が話題になって、「わが子」って言ったら、中学校の先生をしているSさんが「あが子」だって言うの。」

「ああ、そう言えば、母が言ってたな。「わが」は「あが」よりも敬意が高いから、天皇のことを「わが大君」と言い、「あが」は「わが」よりも敬意が低いけれど、それだけに親しみの深い感じがあるから、母親を「あが君」と言う例があるって……。」

「そうなの。それで、愛する「わが子」は「あが子」なんだ。」

だから
「あが子」なのね



敬意



わが …(例) 天皇に対して
「わが大君」

あが …(例) 母親に対して
「あが君」

「あが」の方が
親しみ深い感じが
あるそうだよ



【編集部注】「我が子はぐくめ天の鶴群」(巻9 - 1791)は、原文が「吾子羽曇天之鶴群」ですから、「吾」が「あが」なのか「わが」なのか、わかりません。天皇の「わが大君」は「和我於保伎美」(巻18 - 4059)とあり、母親の「あが君」は「安我吉美」(巻19 - 4169)とあることでわかります。なお、「あが子」は、「安我故」(巻19 - 4220)とあります。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (114)

「あまの」と「あめの」

子どもたちの寝静まったあと、タモツ君のお父さんとお母さんが話しています。

「その「あが子」もだけど、ぼくは、「天の鶴群」の「あめの」のほうが気になったよ。」

「そ。高校のときかな。この歌が教科書に出ていて、「天の」は「あまの」ではないかって、先生に質問した子がいた。」

「そうだよ。だって、銀河は「あまのがわ」、天の橋立は「あまのはしだて」だもんね。」

「そう、そう。その子も、そう言った。そのときの国語の先生、にこにこしながら、『すばらしい質問です。伝統のある日本語では「あまの」になるけど、八世紀には「天地」を「あめつち」としたように、「天の」を「あめの」と言う言い方が生まれたんですね。「天火・天下」は「あめのひ・あめのした」、古事記では「天の香具山」まで「あめのかぐやま」と言い換えています。「あめのたづむら」もその時代の新語だったのでしょう。』って。」

天の川	あまのがわ
天の橋立	あまのはしだて
天 地	あめつち
天 火	あめのひ
天 下	あめのした
天の香具山	あめのかぐやま



【編集部注】「天の川」が「あまのがわ」であることは、「安麻乃可波」（巻20 - 4308）などで、「天火」が「あめのひ」であることは、「君が行く道の長手を繰り畳ね焼き滅ぼさむ天の火（安米能火）もがも」（巻15 - 3724）で、「天下」が「あめのした」であることは、「安米能之多」（巻18 - 4122）などで、わかります。なお、「天の香具山」は、万葉集では「天之香具山・天之香来山・天之芳来山・天芳山」とあって、「あま」か「あめ」かわかりませんが、古事記には「阿米能迦具夜麻」とあって、「あめ」です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (115)

「たづ」と「つる」

学校の帰りにおばあさんのところに寄ったタモツ君がおばあさんと話しています。

「おばあちゃん、あが子はぐくめ天の鶴群あめ たづむらっていう歌、知ってる？」

「旅人の宿りせむ野に霜降らば、でしょ。」
たびびと やど

「そう！ お父さんが教えてくれたんだ。「たづむら」って、「つるのむれ」ということなんだって。大昔は「つる」を「たづ」っていったんだね。」

「そうか。タモっちゃんは、そう思ったんだ。」

「そうじゃないの。」

「大昔も「つる」は「つる」だったの。でも、歌に詠むときには「たづ」っていうの。むずかしいことばだけど、「つる」は俗語、「たづ」は雅語なの。」

「へー。ゾクゴの「つる」がガゴでは「たづ」になるんだね。」



たづむら
鶴群＝つるのむれ

鶴

雅語「たづ」

俗語「つる」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (116)

雅語と俗語

学校の帰りに寄ったおばあさんの家で、タモツ君がおばあさんと話しています。

「お父さんが教えてくれたから「たづ」が万葉集にあるのはわかるけど、万葉集って歌の本でしょ。どうしてゾクゴの「つる」ということばがあったって、わかるの。」

「すごい！ タモっちゃん、よく気がついたわね。歌では「たづ」になるから、歌に「つる」が出てくるわけがないのよね。でも、「みたなあ」という意味の「みつるかも」を「見鶴鴨」と書いてあったりするの。鳥の「つる」ということばがあったから、「た」にあたる「つる」ということばが「鶴」という漢字で表せたの。わかる？ むずかしいかな。」

「漢字の「鶴」という字が「つる」だから、「つる」のところを「鶴」って書いたんだね。」

「そう。タモっちゃんは、ゲロゲロ鳴く「かえる」を知ってるでしょ。この「かえる」の雅語が「かわず」なの。昔のかなづかいでは「かへる」と「かはづ」って書くけど。」

み つ る か も = (意味) 見たなあ
↓ ↓ ↓
見 鶴 鴨
(真仮名)



【編集部注】タモツ君のおばあさんも気にしていますが、「見たなあ」の「みつるかも」を「見鶴鴨」と書いた「見」は意味も音もあっている使い方ですが、「鶴鴨」は音だけを借りた使い方です。この「鶴・鴨」のように意味を捨てて音を表すだけに用いた漢字を真仮名（万葉仮名）といいます。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (117)

「かはづ」と「かへる」

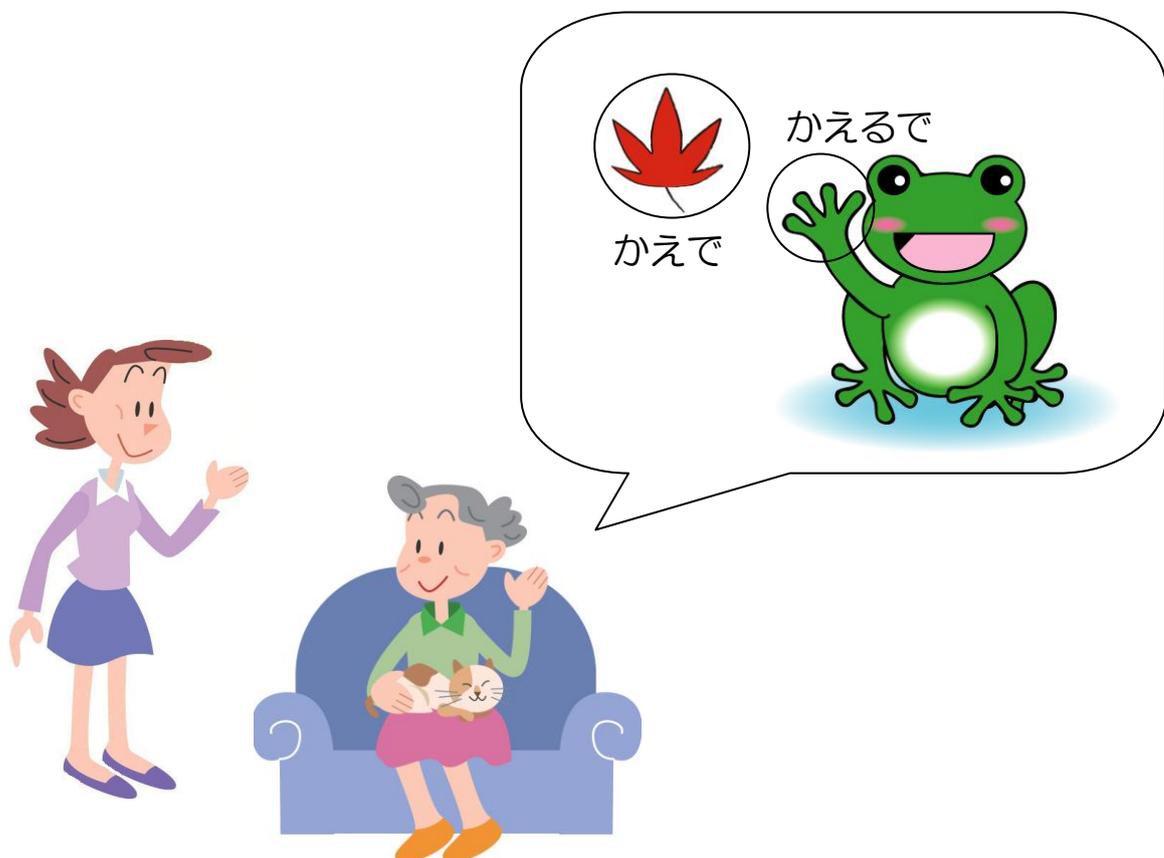
タモツ君のお母さんとおばあさんが話しています。

「タモツがお義母さんに教わったからって、「かえる」と「かわず」のことを保夫さんに話したのですけれど、「つる」は「みつるかも」でわかったけど、「かえる」はどうしてわかるのかって、きいていました。」

「そう。わたしも言ってしまってから、しまった！って、思ったの。タモっちゃんは、小学生でしょ、ちょっと困るのよね。和子さんは、樹木の「かえで」が「かえるで」であったことは、ご存じでしょ。」

「ええ。^{かえで}楓の葉が水掻きのあるかえるの手のような形だからですよね。」

「そう。その「かえるで」だとわかる歌が「^{こもちやまわか}子持山若かへるてもみつまで」という歌なの。この歌、小学生には話しにくいのよね。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (118)

「若かへるてのもみつまで」

タモツ君のお母さんとおばあさんが話しています。

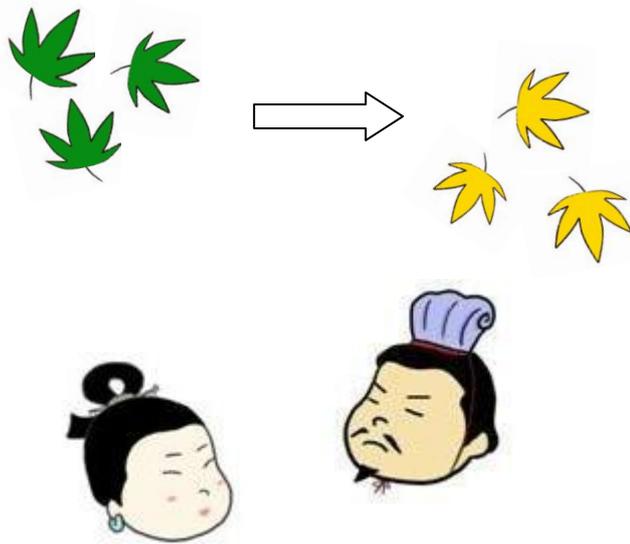
「お義母さん、「かえで」が「かへるで」であることのわかる歌が小学生に話しにくいって、
どういうことですか。」

「ええ。^{こもちやま}「子持山の^{かえで}若い楓の葉が紅葉するまで」というところまでは、いいの。あとが困る
の。^{あずまうた}東歌だから、「^わ寝^ももと^な我は思ふ^も汝はあどか思ふ」っていうの。」

「あら、そんな歌なんですか。」

「そう。「寝ようと私は思う。あなたはどう思う」というのだけれど、これ、小学生には、
話しにくいでしょ。」

「そうですね。話せないですね。でも、芽吹いたばかりの緑の葉がまっ黄色に色づくまで、
春から秋まで、ずっと共寝していたいなんて、ずいぶん激しい歌ですね。」



子持山 若かへるての 紅葉つまで
寝もと我は思ふ 汝はあどか思ふ

【編集部注】「子持山」の歌は、万葉集巻14 - 3494の歌です。原文は「^{こもちやま}児毛知夜麻
^{わか}か^かへ^るて^の ^もみ^つま^で ^ねも^とわ^はも^ふ ^なは^あど^かも^ふ
和可加倣流豆能 毛美都麻豆 宿毛等^和波毛布 汝波安杼可毛布」とあります。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (119)

「まっ黄色に色づく？」

タモツ君のおばあさんの家でタモツ君のお母さんとおばあさんが話しています。

「和子さんは、『子持山若かへるてのもみつまで』が『芽吹いたばかりの緑の楓かえでの葉がまっ黄色に色づくまで』だと思ったのね。」

「ええ。へんですか。」

「いえ、「まっ黄色」というのが、意外だったの。」

「あら、楓は秋になると、葉が黄色になりますよ。秋が深まると、茶色やこげ茶色になりますけれど……」

「そう、和子さんはイタヤカエデのことを思い浮かべたのね。モミジカエデだと、黄色でなく、赤になりますよ。」

「そうなんですか。わたし、黄色になる楓しか知りませんでした。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (120)

「黄葉」と「紅葉」

タモツ君のおばあさんの家でタモツ君のお母さんとおばあさんが話しています。

「でも、『子持山こもちやま若かへるてのもみつまで』の「もみつ」は、黄色に色づくというのが正解のようですよ。」

「子持山って群馬県の渋川の北のほうにある山ですよかえでね。その楓は、イタヤカエデなのですか。」

「さあ、それはわからないけれど、万葉集のころは紅葉かえでというとき、山全体が黄色になるのが賞美されたらしいの。」

「山全体が？」

「そうらしいの。万葉集では、「黄葉・黄変」と書いて「もみち」とか「もみちよば」と訓ませることが多くて、「紅葉・赤葉」と書いた例は、一例ずつしかないんですって。」



「もみち」

紅葉 … 1 例

黄葉 … 30 例

「もみちよば」

赤葉 … 1 例

黄葉 … 30 例



【編集部注】正宗敦夫『万葉集総索引』によると、名詞の「もみち」と訓む「紅葉」は1例、「黄葉」は30例、「もみちよば」と訓む「黄葉」は30例、「赤葉」は1例です。なお、今日では「毛美知・母美知」と書かれた例から、万葉集の時代は「もみち」であったとされますが、『万葉集総索引』が作られたころは「もみち」であると考えられていました。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (121)

「紅葉」と「赤葉」

タモツ君のおばあさんの家でタモツ君のお母さんとおばあさんが話しています。

「お義母さん、万葉集には、「もみち」または「もみちば」と訓ませる「黄葉・黄変」の用例がたくさんあって、「紅葉・赤葉」の用例は一例ずつしかないということはわかりましたが、そのことがどうして万葉集の時代には、山全体が黄色になるのが楽しまれたということになるのでしょうか。」

「圧倒多数が「黄葉・黄変」と書かれていて、その三十分の一が「紅葉・赤葉」なのだから、「もみつ」というと、たぶん、大きく山全体が黄色に色づくことをいったのだろうけれど、そのうちに、ぽつんぽつんと赤く色づく木の美しさが注目されるようになって、「紅葉・赤葉」と書いたのだろうという想像。大きな景観を楽しむのがふつうで、時代が下ってから、部分を注目するような繊細な美意識が芽生えたのではないかという解釈ね。」



【編集部注】「紅葉」とあるのは「妹が^{いも}りと馬^{うま}に鞍^{くら}置きて生駒山^{いこまやま}打ち越え来ればもみち
(紅葉) 散りつつ」(巻 10 - 2201)、「赤葉」とあるのは「……百^{ももた}足らず 三十^{みそつき}槻^えが枝に
みづ^え枝^えさす 秋^ばのもみち^ば葉 (赤葉) 巻き持てる 小鈴^{こすず}もゆらに……」(巻 13 - 3223)。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (122)

「松」と「鶴」

タモツ君のおばあさんの家でタモツ君のお母さんとおばあさんが話しています。

「そうそう、タモっちゃんに、「つる」が俗語で、歌では雅語の「たづ」が使われるって話したけど、紀貫之の土佐日記には、「つる」を詠みこんだ歌がありますね。」

「ああ、「千代の友とぞ思ふべらなる」とか、でしたっけ？」

「そう。「見渡せば松のうれごとにすむ鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる」っていうの。」

「そうか、「千代の友」じゃなく、鶴と松とが永遠の仲間同士の「千代のどち」なんですね。たしか、一月の九日に宇多の松原を過ぎて行くときに詠んでいるのでしたよね。」

「和子さん、よく覚えていますね。この間、なにげなく土佐日記を見ていたら、この歌があって、びっくり。「もとごとに波うちよせ、枝ごとに鶴ぞ飛びかよふ」という情景だからなのかしら、万葉集にも古今集にも出てこない「つる」が歌われているんですよね。」



見渡せば 松のうれごとにすむ鶴は
千代のどちとぞ 思ふべらなる



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (123)

「ああうまかった、うしゃまけた」

給食の時間が済んで、小3のタモツ君の隣の席のサユリさんが言いました。

「ああうまかった、うしゃまけた。」

「なに、今の。」と、タモツ君が聞きました。

「うん。先週の金曜日から富山のおばあちゃんが来ているの。御飯が終わると、言うの。ごちそうさま。ああうまかった、うしゃまけた！ って。」

「ふーん、うまかったって、おいしかったってことでしょ。うしゃまけたってどういうこと？」

「うん。おばあちゃんに聞いたら、馬が勝ったから、牛は負けたんだって。」

「へーえ、そうか。馬が勝ったから、牛は負けたなんだ。おどろき、もものき、さんしょのき。たまげた、こまげた、ひよりげた。」

「うまかった、うしゃまけた」

||

馬勝った



||

牛負けた



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (124)

「たまげた、こまげた、ひよりげた」

給食の時間のあと、サユリさんが隣の席のタモツ君と話しています。

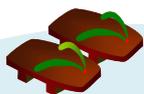
「おどろき、もものき、さんしょのきは、知ってたけど、たまげた、なんとかって、知らない。タモっちゃん、なんて言った？」

「たまげた、こまげた、ひよりげた。」

「たまげた、こまげた、ひよりげた、か。げた、げた、げたなんだ。」

「おじいちゃんに教わったんだ。おじいちゃんは、おどろき、もものきだって、すごいんだよ。おどろき、もものき、さんしょのき、ブリキに、たぬきに、ちくおんき、って言う。」

「そういえば、富山のおじさんが、あなたは私の太陽だ、月だ、星だ、カンテラだ、サーチライトだ、ろうそくだ、って言った。お母さんが、明るければよいつでもものじゃないでしょ、って……。」



たまげた、こまげた、ひよりげた



おどろき、もものき、さんしょのき
ブリキに、たぬきに、ちくおんき



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (125)

「8時10分前」

朝です。小3のタモツ君は、校門の近くで、隣の席のサユリさんに会いました。

「サユリちゃん、おはよう！」

「おはよう、タモっちゃん。急ごう、あとジップンで8時になる。」

「あと、ジップン？」

「ほら、大時計を見てごらん、8時ジップン前でしょ。」

「長針が10のところだから、ほんとにあと、ジップンだね。」

席に着いてから、サユリさんが言いました。

「タモっちゃんは、さっき、ジップンって言ったよね。」

「うん、ジップンでしょ。」

「昔はそうだったけど、今はジップンでよくなったのよ。」



急ごう！
あとジップンよ！

あとジップン！



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (126)

ジュップンかジップンか

学校の帰りに寄ったおばあさんの家で、タモツ君がおばあさんに言いました。

「学校でサユリちゃんに言われたんだけど、8時10分前の10分は、昔はジップンで、今はジュップンって言うようになったの？」

おばあさんが答えます。

「ジュップンって言う人もいるけど、今も10分はジップンですよ。」

「お父さんもお母さんもジップンって言うから、ぼくもジップンだと思ってたけど、サユリちゃんはジュップンなんだ。」

「十という漢字の音には、^{おん}ジュウというのとジツというのとがあるの。だから、ジツでいいのだけど、新しくなった常用漢字表では、ジュツということもあるって、備考というつけたしの欄に書いてあるの。十分をジュップンって言う人が多くなったのね。」

漢字	音訓	例	備考
十	ジュウ	十字架、十文字	十重二十重(とえはたえ) 二十・二十歳(はたち) 二十日(はつか)
	ジツ	十回	「ジュツ」とも
	とお	十、十日	
	と	十色、十重	

※常用漢字表より抜粋し、編集部で作成

ジュップン?
ジップン?



「ジップン」
ですよ。



【編集部注】おばあさんの言うように、2010年11月30日に告示された「常用漢字表」では、「十」には「ジュウ ジツ とお と」の音訓が示され、備考に《「ジュツ」とも。》とあります。ジュツがジュウ・ジツと並ぶ音として認められているわけではありません。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (127)

常用漢字表の備考の音

タモツ君のおばあさんの家でタモツ君のお母さんとおばあさんが話しています。

「漢字の十には「ジュウ ジツ とお と」の音訓があつて、備考に《「ジュツ」とも。》とあるのだと、タモツに教えてくださったのだそうですけれど、常用漢字表の備考には、このようなことがほかにもあるのですか。」

「ええ。音についてだと、三位^{おん}一体がサンミイッタイ、因縁^{いんねん}がインネン、親王^{しんおう}がシンノウ、反応^{はんじやう}がハンノウ、観音^{かんのん}がカンノン、安穩^{あんおん}がアンノン、天皇^{てんかう}がテンノウになるなどの連声といわれる注記のほかに、堪能^{かんノウ}はタンノウとも、合点^{ガッテン}はガテンとも、昆布^{コンブ}はコブとも、紺屋^{コンヤ}はコウヤとも、詩歌^{シカ}はシイカとも、憧憬^{ショウケイ}はドウケイとも、貼付^{テウフ}はテンブとも、富貴^{フキ}はフッキとも、文字^{モンジ}はモジともなどとありますよ。それぞれ、タン・ガ・コ・コウ・シイ・ドウ・テン・フツ・モという音がふつうに用いられるというわけではないということなのよね。」

例	読み	備考
堪能	カンノウ	タンノウとも
合点	ガッテン	ガテンとも
昆布	コンブ	コブとも
紺屋	コンヤ	コウヤとも
詩歌	シカ	シイカとも
憧憬	ショウケイ	ドウケイとも
貼付	テウフ	テンブとも
富貴	フキ	フッキとも
文字	モンジ	モジとも

※常用漢字表より抜粋し、編集部で作成



【編集部注】連声というのは、前の音の影響を受けてア・ヤ・ワ行の音がマ・ナ・

タ行の音に変わる現象をいいます。三位^{サム キ サムミ}=sam+wi→sammi、陰陽^{オム ヨー オムミョー}=om+yō→ommyō、

観音^{カン オン カンノン}=kan+on→kannon、雪隠^{セツ イン セツチン}=set+in→settin。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (128)

憧憬はドウケイでない？

タモツ君のおばあさんの家でタモツ君のお母さんとおばあさんが話しています。

「お義母さま、ショウケイって、あこがれの憧憬でしょう？ 常用漢字表では備考に《「ドウケイ」とも。》って、書いてあるのですか。」

「そうよ。憧は、音が「ショウ」、訓が「あこがれる」なの。」

「でも、リッシンベンに児童のドウじゃありませんか。」

「あら、和子さんはカネヘンに童の字は何て読むかしら。」

「カネヘンに童は、お寺の鐘の「かね」ですよね。そうか、鐘楼・警鐘・梵鐘の「ショウ」ですね。」

「メヘンに童は、瞳孔のドウだけど、リッシンベンに童は、憧憬のショウで、カネヘンに童は、端午の節句に飾るお人形の鐘馗さまのショウ、鍾愛のショウなのね。」

漢字	音訓	例	備考
憧	ショウ	憧憬	「憧憬」は「ドウケイ」とも。
	あこがれる	憧れる、憧れ	

※常用漢字表より抜粋し、編集部で作成

憧 ショウ
鐘 ショウ
瞳 ドウ



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (129)

憧憬と惆怅

子どもたちの寝静まったあと、タモツ君のお父さんとお母さんが話しています。

「今日、お義母さんに教わったのだけど、保夫さん、あこがれの憧憬はショウケイだって、知ってた？」

「うん。確か芥川龍之介はドウケイって読まれるのがいやで、リッシンベンに尚のショウと、リッシンベンに兄のケイを書いたって、聞いたことがある。」

「惆怅？」

「そう。」

「それ、何かの間違いよ。私、調べてみたの。夏目漱石の『吾輩は猫である』の六に「寒月^{など}杯もそんなに憧憬したり惆怅したり独りで六づかしがらないで」とあるの。惆怅はショウキョウまたはショウコウで、がっかりすることという意味の別のことばなのよ。」

ショウキョウ
ショウ コウ

惆怅 …がっかりすること

ショウ ケイ
憧憬

…あこがれること



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (130)

「本当」と「本統」など

子どもたちの寝静まったあと、タモツ君のお父さんとお母さんが話しています。

「驚いたなあ。漱石は「あこがれたりがっかりしたり」ということで「しょうけい 憧憬しやうきやう したり 愉ゆ 悦えつ したり」と書いているんだ。」

「そうなの。私も愉悦なんて、初めて見たことばだから、辞書で調べたら、読みはショウコウなの。『吾輩は猫である』の原文にある振り仮名は「しょうけい しょうけい」だけど……」

「ふーん。学生のころ、芥川龍之介はショウケイと読ませたかったのが憧憬でなく愉悦と書いたって聞いたから、本当を志賀直哉は本統と書いたり、誰だか忘れたけど、親切を深切と書いたりするのと同じだと思っていた。」

「そうよね。訓読みになるけど、仕事と為事、威丈高と居丈高なんかも、同じね。同じことばの書き方の違いだと思い込んでしまうわ。」

憧憬 愉悦

本当 本統

親切 深切

仕事 為事

居丈高 威丈高

同じ言葉の書き方の
違いだと思いこんで
しまうわね。



【編集部注】「しごと」は「すること」で、「し」は動詞の「する」の連用形です。「しあい」も「しあうこと」ですから、「試合・仕合・為合」などと書くことができます。「しあわせ」も「為合わせ」で、めぐり合わせということですが、「仕合せ」と書き、よいめぐり合わせについては「幸せ」と書きます。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (131)

ジュウとジツ

夕食後の静かな時間、タモツ君のおばあさんとおじいさんが話しています。

「先日、タモっちゃんに、10分前はジップン前かジュップン前かって聞かれたのですけれど、
どうして、ジュツなんて言うようになったのかしら。」

「うん。ジュウというときの口の構えでジツを言うからなのだろうね。」

「ジュツというのは、ジユクやジュツの促音便ですよ。」

「そう。述懐・熟考・術策・術中・恤兵^{ジュツペイ}のように、力行・サ行・タ行・ハ行の前のクやツが
促音になる。もっとも、熟視・熟睡・熟成・熟眠などはジユクのままだけど……。」

「ジユクやジュツがジュツになるようには、ジュウはジュツにならない？」

「ならない。銃器・重機・什器はジュウキ、重厚はジュウコウ、重視はジュウシ、渋滞・重
態はジュウタイ、重箱はジュウバコ、従犯・重版はジュウハンだろ。」

ジユクやジュツの促音便 → ジュツ

述懐	ジュツカイ
熟考	ジュツコウ
術策	ジュツサク
術中	ジュツチュウ
恤兵	ジュツペイ

力行・サ行・タ行・ハ行の前の
クやツが促音になっている。

ジュウの~~促音便~~ → ジュツ

銃器・重機・什器	ジュウキ
重厚	ジュウコウ
重視	ジュウシ
渋滞・重態	ジュウタイ
重箱	ジュウバコ
従犯・重版	ジュウハン



【編集部注】促音便になる音は、常用漢字表の音としては掲げられていません。「熟」は「ジユク」だけが、「述・術」は「ジュツ」だけが音として示されています。「十」に「ジュウ ジツ」とあるのは、「ジツ」が「ジュウ」とは別の音だからです。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (132)

ゴウとガッ、ソウとサッなど

夕食後の静かな時間、タモツ君のおばあさんとおじいさんが話しています。

「ジュウがジュッにならないのはわかったけど、ジップン前をジュップン前と言う人はいますよね。」

「そう。ジュウの口の構えのままと言うからね。会合・合同のゴウ、合うの合には、ガッ・カッという音もある。合宿とか合併とかのガッ、合戦のカッだね。この場合は、ゴウの口の構えでゴッシュク・ゴッペイ・ゴッセンなんて言う人はいない……。」

「ジュとジは似ているけど、ゴとガ・カは全然違うからかしら……。」

「そうだろうね。早退・早朝のソウは、早急・早速ではサッ。納税のノウは、納豆・納得ではナッ。法律のハウは、法度・法被ではハッ、法主ではホッ。坊主、お坊さんのボウは、坊ちゃんではボッ。こういうのは、ちゃんと言い分けるからね。」



早退 ソウタイ	早急 サツキュウ
早朝 ソウチョウ	早速 サツソク
納税 ノウゼイ	納豆 ナットウ
	納得 ナットク
法律 ホウリツ	法度 ハット
	法被 ハツピ
	法主 ホツシュ
坊主 ボウズ	坊ちゃん ボツちゃん



【編集部注】タモツ君のおじいさんの言うように、「早急」はサツキュウですが、最近ではソウキュウと言われることもあります。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (133)

〇ウと〇ッ

夕食後の静かな時間、タモツ君のおばあさんとおじいさんが話しています。

「ジュウがジュッにはならないということでしたけれど、ゴウとガッ・カッ、ソウとサッ、ノウとナッ、ホウとハッ・ホッ、ボウとボッなどがあるのですから、〇ウから〇ッという変化は考えられないのかしら。」

「よくはわからないけど、変化と言うより、〇ウと〇ッの二つがあったと見るほうがよいよ。うだよ。「十」についていうと、ジフという音で取り入れられていたのが、室町時代にジウとジッになったらしい。常用漢字表にあるほかの漢字では、「合」はガフがガウとガッ・カッ、「早」はサフがサウとサッ、「納」はナフがナウ・ナッ・ナ・ナンに、「法」にはハフとホフの二つがあって、ハフがハウとハッ、「坊」はバウがバウとボッ——ということのようだよ。」

十	ジフ	→	ジウ・ジッ
合	ガフ	→	ガウ・ガッ・カッ
早	サフ	→	サウ・サッ
納	ナフ	→	ナウ・ナッ・ナ・ナン
法	ハフ ホフ	→	ハウ・ハッ ホウ・ホッ
坊	バウ	→	バウ・ボッ



【編集部注】常用漢字表では、「十」には「ジュウ ジッ」、「合」には「ゴウ ガッ カッ」、「早」には「ソウ サッ」、「納」には「ノウ ナッ ナ ナン トウ」、「法」には「ホウ ハッ ホッ」、「坊」には「ボウ ボッ」の音が掲げられています。促音になる「〇ッ」の音の掲げられているのはこの六字だけです。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (134)

ジッコウとジュッコウ

夕食後の静かな時間、タモツ君のおばあさんとおじいさんが話しています。

「『ジュッコウしてジッコウに移す。』ならわかるけど、『ジッコウしてジュッコウする。』はへんよね。してしまってから後悔して反省するにしても……。」

「おもしろい例文を考えたね。ジッとジュッとが別なのに、十分前はジップン前でもジュップン前でもいいというのが気に入らないみたいだね。」

「そうなの。常用漢字表の「十」の備考の《「ジュツ」とも。》は、どうなのかしら。」

「正式の音としては認めないが、そう発音する人が多くなっているから備考に注記を加えたということでもいいのじゃないの。」

「そうかな。十階・十戒、十干十二支の十干、十歳・十指・十進法、捕り物の十手、蕉門十哲の十などがジュツといわれると、どうも落ち着かないのよね。」



「ジュツテ」と
言われると
落ち着かないわね。



【編集部注】タモツ君のおばあさんの考えた例文は、漢字を宛てると、「熟考して実行に移す。」「実行して熟考する。」のようです。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (135)

「実行のジッって？」

タモツ君のお母さんがおばあさんの家に来て、お持たせの菓子を食べ、お茶を飲みながら、縁側でおばあさんと話しています。

「先日、常用漢字表に「〇ッ」という音が表示されているのは、合十早納法坊の六字だけだとお義父さんが言ってらしたってお義母さんに教わったので、得意になって、タモツに話したら、『実はジツだけど、実行はジッコウだよ。』って、言われました。どうしてジツという音が表示されていないのでしょうか。」

「あらあら、和子さんがそんな質問をするなんて……。」

「へんですか。」

「ジツがジツになるのは、音便ではありませんか。圧のアツだって、圧迫のときはアツだし、悪のアクだって、悪漢のときはアツでしょ。音便形は音として示してないのですよ。」

実 ジツ ……実行 ジッコウ

圧 アツ ……圧迫 アツパク

悪 アク ……悪漢 アツカン



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (136)

音便になる○ツ・○ク

タモツ君のお母さんがおばあさんの家の縁側でおばあさんと話しています。

「そうか。越境のエツ、学校のガツ、滑走のカツ、活発のカツ、喫茶のキツ、血統のケツ、殺到のサツ……、どれも、常用漢字表に音としては示されていないのですよね。」

「そう。カ行・サ行・タ行・ハ行の前のツやクは、促音便になるのよね。」

「ツが促音になるのは、すぐに思い浮かべられますが、クはどうですか。」

「そうね、悪漢のアツ、学校のガツのほかでは、億劫のオツとか閣下のカツとか、菊花のキツ、国家のコツ、酷寒のコツ、作家のサツ、即効のソツ、卓球のタツ、築港のチツ、特価のトツ、独行のドツ、肉感のニツ、白球のハツ、復権のフツ、北海のホツ、木工のモツ、欲求のヨツ、落下のラツ、六法のロツ……。」

「ずいぶんありますね。そうそう、チが促音になる七珍のシツ、八角のハツがありました。」

越境	エツキョウ	億劫	オツクウ	七珍	シツチン
学校	ガツコウ	閣下	カツカ	八角	ハツカク
滑走	カツソウ	菊花	キツカ		
活発	カツパツ	国家	コツカ		
喫茶	キツサ	酷寒	コツカン		
血統	ケツトウ	作家	サツカ		
殺到	サツトウ		：		
			：		



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (137)

音便になる〇チ・〇キ

タモツ君のお母さんがおばあさんの家の縁側でおばあさんと話しています。

「タ行・ハ行の前のチが促音になる七珍八宝シツチンハツポウのシツとハツはおもしろいですね。そういえば、キが促音になるのって、和子さん、思い浮かびます？」

「キですか。区域のイキとか液体のエキとか式典のシキとか座席のセキとか、〇キになる漢字って、多くはありませんよね。」

「そうなの。でも、確かにあるの。」

「ああ、テキじゃありませんか。抜き書きの摘記のテッ、的確のテッ……。」

「お見事。子どものころ、敵機来襲なんて言われたものよ。そのテッキのテッ。」

「どれもカ行の前のキですね。適作・摘出・敵視・適切・敵船・敵対・敵地・適当・摘発・適否・適法……、どれもテキのままですよね。カ行の前でも、摘花・摘果はテキカかしら。」

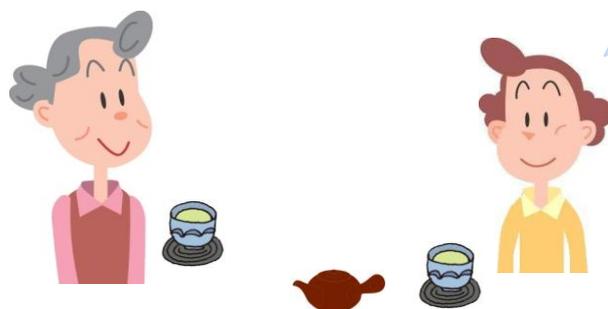
摘記 テッキ

的確 テツカク

敵機 テッキ

カ行の前のキが促音になっている。

摘花・摘果は
テキカ？テツカ？



【編集部注】タモツ君のおばあさんの言った「七珍八宝」は、四字熟語ではありません。たぶん、タ行の前のチ、ハ行の前のチが促音になる語の例として「七珍」と「八宝」を組み合わせたのでしょシツチンマンポウう。あらゆる宝物のことをいう四字熟語は「七珍万宝」です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (138)

テキカク・テッカク

タモツ君のお母さんがおばあさんの家の縁側でおばあさんと話しています。

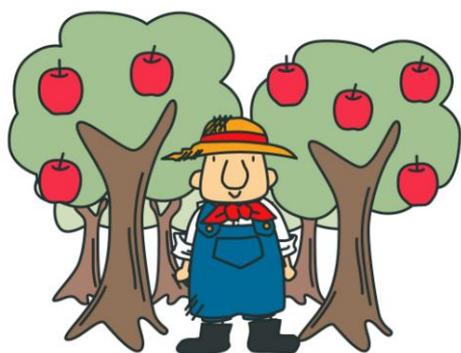
「果樹農家の方は、大きな実にするのに、花摘みや実摘みをするのよね。それが摘花・摘果
だけど、テッカって言ってらしたように思うけど……。」

「そうですか。テレビでアナウンサーがテキカと言うのを聞いたような気がします。」

「さっき、和子さんはテキカクをテッカクっておっしゃったでしょう？ 私たちの年代だと、
テキカクですよ。」

「十分がジップンとジュップンの両方に言われるように、的確もテキカクとテッカクの両方
があるのでしょうか。」

「摘記・適期もテキキとテッキ。適格・的確はテキカクだけど、敵機来襲の敵機はずっと
テッキだった。摘記・適期もテッキかしら。私たちの年代でもゆれているようですね。」



摘花・摘果 $\left\{ \begin{array}{l} \text{テキカ} \\ \text{テッカ} \end{array} \right.$

摘記・適期 $\left\{ \begin{array}{l} \text{テキキ} \\ \text{テッキ} \end{array} \right.$



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (139)

めぶか？

小学校4年生になったタモツ君がお父さんと散歩をしています。タモツ君の妹、ぴかぴかの1年生のエミちゃんも一緒です。エミちゃんが同級生のタケシ君に会いました。

「タケシ君、そんなに帽子をめぶかにかぶって、どこへ行くの？」

「あ、エミちゃん、お父さんたちとお散歩？ お母さんを迎えに駅まで……。」

「そ、いってらっしゃい！ じゃあね……。」

タケシ君が行き過ぎてから、タモツ君が言いました。

「エミ、帽子はめぶかにかぶるんじゃないよ、まぶかにかぶるんだよ。」

「まぶか？ 目がかくれるくらい深くかぶるんだから、めぶかでしょ。」

お父さんが言いました。

「そう。だけど、まぶかなんだ。目のふただって、まぶただろ。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (140)

「めじり」と「まなじり」

タモツ君とエミちゃんがお父さんと散歩しています。

「どうして目のふたがまぶたになるの？」と、エミちゃん。

「目ということばとふたということばが合わさって一つのことばになるとときには、「め」が「ま」になるんだよ。」と、お父さん。

「でも、目の耳に近いところはめじりだよ。」と、タモツ君。

「そうだね。昔はまなじりって言ったんだ。「な」というのは「みなと」の「な」。「の」にあたる「な」。みなとというのは、水の門ということなんだ。まなじりは目のしりだね。」

「まなじりが昔で、今はめじりなんだ。」

「だから、「めじりにしわができる」って言うけど、「まなじりにしわができる」とは言わないし、「まなじりを決する」とは言っても、「めじりを決する」とは言わない。」



昔 まなじり	今 めじり
まなじりに し わができる	めじりにしわができる
まなじりを決する	めじりを 決 する

【編集部注】お父さんが言っている「まなじりを決する」は、「まなじりを裂く」とも言い、「目を大きく見開く」ということです。怒ったり決心したりするときの表情です。「まなじりをつりあげて怒る」などとも言います。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (141)

「まぶしい」と「まばゆい」

小4のタモツ君と小1のエミちゃんがお父さんと散歩しています。

「あ、夕焼けだ！」

タモツ君の声に、お父さんとエミちゃんが家並みの向こうの西の空を見ます。

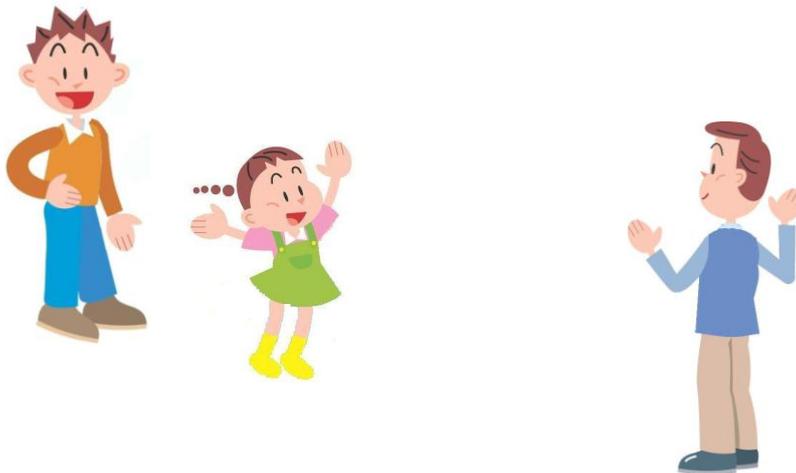
「お日さまがどんどん沈んでいく！」と、お父さん。

「まっかっかだね。まぶしくないね。」と、エミちゃん。

「そうだ。タモツは、まばゆいってことばがわかるかな。」と、お父さん。

「まばゆいって、まぶしいってことだよ。」

「そう。まぶしいは、明るすぎるので目をふせる感じ、まばゆいは、強い光が目当たって映える感じ。伏せるとか映えるとかって、タモツには、まだわからないかな。目を下に向けてるのが、目を伏せる。目に光が当たって輝くのが、目に映える。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (142)

「またたく」と「まばたき」

お父さんとタモツ君とエミちゃんの散歩の帰りです。もう夕暮れです。エミちゃんが一番星を見つけて、叫びました。

「あ、お星さま！」

「エミ、小さいとき、お星さまがぴかっているって言ったの、覚えてる？」と、タモツ君。

「知らない。ぴかっているなんて、言った？」

「そうだよ。ぴかっているって言ってた。ひかっているって言うより、すてきだった。」

「お星さまは、またたいているんだよね。」

「すごい！ エミは、またたくなんていうことばを覚えたんだ。」と、お父さん。

「またたくって、まばたきをすることなんだよね。前に、おばあちゃんに教わったよ。目がたたくがまたたくで、目のはたきがまばたきだって。」と、タモツ君。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (143)

Tamotu と Tamotsu

夕食が済んで、くつろいでいる時です。タモツ君がお父さんに言いました。

「今日、学校でローマ字を習ったんだよ。ぼくの名前は、Tamotu って、書くんだよ。」

「タモツのツは tsu でなくて、tu なんだ。」

「うん。前に、おじいちゃんが Tamotsu って書いてくれたことがあったから、先生にきい
ら、英語のときはそう書くけど、国語の教科書では、ツは tu なんだって。」

「そうか。教科書は訓令式、英語はヘボン式なんだね。」

「クンレーシキって？」

「うん。ローマ字で日本語を書き表すのにも、いろんな書き方がある。日本式とかヘボン式
とか。どの書き方がいいか、文部省が臨時ローマ字調査会というのを作って考えさせたんだ。
訓令式というのは、1937年に内閣訓令として発表された書き方なんだよ。」



Tamotu
訓令式

Tamotsu
ヘボン式

【編集部注】昭和29年12月9日、内閣告示第1号として「ローマ字のつづり方」が出されました。「1 一般に国語を書き表わす場合は、第1表に掲げたつづり方によるものとする。2 国際的關係その他従来の慣例をにわかに改めがたい事情にある場合に限り、第2表に掲げたつづり方によってもさしつかえない。」ということで、第1表には訓令式が、第2表には標準式 (sha shi shu sho/tsu/cha chi chu cho/fu/ja ji ju jo) と日本式 (di du dya dyu dyo/kwa/gwa/wo) が示されています。なお、「ジ・ジャ・ジュ・ジョ」は、日本式と訓令式では「zi zya zyu zyo」ですが、標準式では「ji ja ju jo」です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (144)

ヘボン式と標準式

子どもたちの寝静まったあと、タモツ君のお父さんとお母さんが話しています。

「速いもので、もうタモツがローマ字を教わるようになったんだね。」

「そう。もう4年生よ。さっき、ローマ字には、いろんな書き方があるって話していたわね。

ヘボン式って、標準式と同じ？」

「ああ、アメリカ人宣教師のヘボンの考案したのがヘボン式のローマ字綴り。シを shi、チを chi、ツを tsu にする綴り方。『和英語林集成』の第3版で使われているので有名だよ。ヘボン式を修正したのが標準式だろ。」

「そうなんだ。ヘボン式と標準式とで、違うのがあるの？」

「うん。『和英語林集成』の第3版では、もう、zu になっているから標準式と同じなんだけど、初期のヘボン式ではツが dzu だったんだって。」

ヘボン式

シ …… shi
チ …… chi
ツ …… tsu
ツ …… dzu → zu



【編集部注】ヘボン James Curtis Hepburn (1815~1911) は、安政6年(1859年)に来日し、医療・伝道に携わり、和英・英和辞典『和英語林集成』を完成しました。初版は慶応3年(1867年)に、ヘボン式ローマ字で知られる第3版は明治19年(1886年)に刊行されました。明治25年(1892年)にアメリカに帰りました。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (145)

『ローマ字日記』

子どもたちの寝静まったあと、タモツ君のお父さんとお母さんが話しています。

「日本式のローマ字綴りは、確か物理学者の田中館愛橘^{たなかだてあいきつ}が提唱したのよね。」

「そう。日本人が日本語を書き表すのに、同じ行の子音が異なっては不便だというのでね。」

「石川啄木^{たくぼく}の『ローマ字日記』を文庫本で読んでいたら、途中でシが si から shi になって、びっくりしたことがあった。」

「うん、1909年4月13日の途中からだろ。前日の12日に、ヘボン式の綴りを括弧書きにして加えた「国音羅馬字法略解」というローマ字表が書かれているんだよね。」

「そうだっけ。でも、おしまいの方は、また、si になるでしょ。」

「よく覚えているね。1911年の分は、日本式。啄木が身につけていたローマ字の綴り方は、日本式だったんだろうね。」



『ローマ字日記』

NIKKI
I
MEIDI 42 NEN
APRIL
.....
Hareta Sora ni susamajii Oto
wo tatete,hagesii Nisikaze ga
huki areta. ...



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (146)

“e” と “a”

小4のタモツ君が学校から帰るなり、言いました。

「お母さん、ただいま！ 今日、すごい発見をしたんだよ。」

「あら、お帰りなさい。で、どんな発見？」

「前に、エミもいっしょにお父さんと散歩したとき、まぶかとかまぶたとかまなじりとかまぶしいとかまばゆいとかまばたきとか、「め」が「ま」になることばのことを話したって言ったでしょ。ローマ字で書くと、me が ma になるんだよね。お酒と酒屋さんの「さけ」と「さか」、お米がなる稲と稲穂の「いね」と「いな」。ほら、sake と saka、ine と ina でしょ。みんな e が a になってるんだよ！」

「すごい！ タモっちゃん、よく気がついたわね。」

「稲と稲穂は、サユリちゃんが見つけたんだ。稲を作ることが稲作なんだって。」

お酒	sake	稲	ine
酒屋さん	saka	稲穂	ina



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (147)

「火」と「ほのお」

学校の帰りに寄ったおばあさんのところで、タモツ君がおばあさんと話しています。

「タモっちゃん、ローマ字を習って、すごい発見をしたんですってね。」

「そう。「目」と「まぶた」、「酒」と「酒屋」、「稲」と「稲穂」、それから、あとで「雨」と

「雨具・雨雲」も見つけたんだけど、me と ma、sake と saka、ine と ina、ame と ama でしょ、みんな e と a なんだ。」

「そうね。すごい、すごい。タモっちゃん、お花を手で折るのをなんて言う？」

「あ、花をたおるって言うんだよね。「手」と「手折る」も te と ta なんだ！」

「そうよね。タモっちゃんは、燃えている火のさきのほうをなんて言うか知ってる？」

「ほのおでしょ。」

「そう。hi が ho になっているの。木のさきのほうは、こずえ。ki と ko よ。」



火	hi	木	ki
ほのお	honoo	こずえ	kozue



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (148)

“i” と “o”

夕食時です。タモツ君がお父さんに言いました。

「きょう、おばあちゃんに、i が o になるのを教わったよ。」

「i が o に？」

「うん。火のさきがほのお、木のさきがこずえ。」

「ああ、そうか。こずえとかこかげとかこだちとかはいいけど、タモツは木の葉っぱは「きのほ」って言うんじゃないかな。」

「うん。「きのほ」でしょ。」

「お父さんたちは、「このほ」って言うよ。実は「きのみ」とも言うけど……。」

「へー、「まなじり」と「めじり」みたいに、「このほ」と「きのほ」、「このみ」と「きのみ」も、古いのと新しいのとがあるのかな。」

このほ konoha

きのほ kinoha



このみ konomi

きのみ kinomi

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (149)

このはな

夕食が済んで、タモツ君がお父さんと話しています。

「タモツもお父さんも、木の花は、「きのはな」っていうだろ。」

「うん。」

「でも、大昔は、「このはな」だったんだよ。」

「このはな？」

「そう。ニニギノミコトのお后^{きさき}さまになった「このはなのさくやひめ」という方がいらっ
しゃったんだ。」

「そうだ、前におばあちゃんが「くだもの」ということばも木の実のことだって……」

「よく思い出したね。「けもの」は「けだもの」ともいうよね、その「だ」なんだ。「くだもの」は「きのもの」なんだね。ほら、ローマ字で、ki と ko と ku になってる。」

「木の花」

きのはな



このはなのさくやひめ



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (150)

にしこり

タモツ君の隣の席のサユリさんが言いました。

「タモっちゃん、にしこりけいさんって知ってる？」

「テニス選手の？」

「そう。新聞に出てたけど、漢字では錦織圭と書くの。まだ習ってない漢字だから、辞書で調べたら、錦は「にしき」が訓で、キンくんという音、織はショクおんとシキが音、「おる」が訓。圭は出てなかった。ふしぎなのは、「にしき」と「おる」の「おり」なのに、「にしきおり」でないこと。新聞の錦織圭の下にNishikori Kei って、書いてあった。」

「あ、shi は英語式で、習ったのはsi だけど、Nisiki - ori の i がなくなると、キオがコになるよ。」

「そうなんだ！ kio の i がなくなると、ko になるんだね。」

錦 織
(訓読) にしき おり
Nishiki-ori
↓
Nishik ori
(にしこり)



錦織 圭
Nishikori Kei